

第29回日本ジオパーク委員会議事録

日時：2016年12月9日(金) 13:00~18:00

場所：永田町合同庁舎1階 第1共用会議室

出席者：

<委員長>

尾池和夫 京都造形芸術大学学長 (日本地震学会)

<副委員長>

中田節也 東京大学地震研究所教授 (日本火山学会)

<委員>五十音順

浅野眞希 筑波大学生命環境系助教 (日本第四紀学会)

阿部宗広 自然公園財団専務理事 (関係団体)

欠 大野希一 島原半島ジオパーク事務局次長 (日本火山学会)

菊地俊夫 首都大学東京 都市環境科学研究科教授 (日本地理学会)

佃 栄吉 産業技術総合研究所理事, 地質調査総合センター代表 (日本地質学会)

中川和之 時事通信社解説委員 (日本地震学会)

成田 賢 全国地質調査業協会連合会会長 (関係団体)

橋詰 潤 明治大学研究・知財戦略機構特任講師 (日本第四紀学会)

平田大二 神奈川県立生命の星・地球博物館館長 (日本地質学会)

宮原育子 宮城学院女子大学現代ビジネス学部教授 (日本地理学会)

<顧問>五十音順

伊藤和明 防災情報機構特定非営利活動法人会長

小泉武栄 東京学芸大学名誉教授

高木秀雄 早稲田大学教育・総合科学学術院教授

欠 町田 洋 東京都立大学名誉教授

<APGN 諮問委員>

渡辺真人 産業技術総合研究所地質情報研究部門地球変動史研究グループ長

<日本ユネスコ国内委員会>

本岡寛子 文部科学省国際統括官付ユネスコ協力官

仙台文子 文部科学省国際統括官付ユネスコ第三係長

矢野由佳 文部科学省国際統括官付ユネスコ第三係員

<関係省庁(オブザーバー)> 建制順・省内五十音順

曾根 進 内閣府地方創生推進事務局参事官補佐

三浦慎司	内閣府地方創生推進事務局
橋本祐樹	内閣府政策統括官(防災担当)付参事官(調査・企画担当)付火山対策担当主査
大須賀亜希子	外務省大臣官房国際文化協力室外務事務官
柴田伊廣	文化庁文化財部記念物課文部科学技官
高島 寛	林野庁森林整備部森林利用課森林環境保全班森林生物多様性専門官
二井内 学	経済産業省産業技術環境局知的基盤整備推進室係長
今村翔太	国土交通省水管理・国土保全局砂防部砂防計画課地震・火山砂防室 火山対策係長
中島 茜	観光庁観光地域振興部観光資源課
松本良一	環境省自然環境局国立公園課国立公園利用推進室
山本 豊	環境省自然環境局国立公園課国立公園利用推進室係長

<事務局>	(局員五十音順)
斉藤清一	JGN 事務局長
下平明彦	JGN 事務局次長
神谷方子	JGN 事務局員
内藤朋子	JGN 事務局員
目代邦康	JGN 事務局主任研究員
森本浩文	JGN 事務局員

- ・事務局より資料の確認
- ・委員長あいさつ
- ・事務局からの報告

事務局：前回の宿題であったユネスコへの申請過程について議題にあげている。

委員長：議事に移る。10箇所あるので1箇所5分程度説明、10分の討議というスケジュールでお願いします。

【洞爺湖有珠山】

委員長：資料2の公開版に沿って説明する。参加者としては関係の首長ら、三松さん、火山マイスターの方々など活躍されているほとんどの方々にご参加いただいた。これもひとつの特徴だったと思う。見学地点については、全部周ることはせず、主だったところだけ見た。洞爺湖幼稚園は国道230号が起伏のある地形に変わったところで、この地点は外せない。今回は遺跡の発掘場など分野を広げた視察をした。三松記念館でお世話になり有珠山にロープウェーで登った。まとめの部分で、一番目のポイントのジオサイトと保全について。前回の噴火からずいぶん時間が経ち草木が茂っていた。そのまま保全してその推移を見る場所と、中味をよく見学してもらうための道を整備していくという両面をかなり苦労して工夫しているということが分かった。そこをたどりながら幼稚園を見に行った。子供達にも分かりやすいように、また歩きやすいように整備され

ており、自然の成り行きを見ることができる。230号はジオサイトにまだ入ることのできない状態のまま、関係機関と交渉中というところが残っているが、最も地学的な現象を見ることができる場所なので、具体的に交渉を成立させて肝心の火山の地形を見学できるように、UGGの審査までに実現するようにしてほしい旨を強く申し入れた。できる見通しであると回答いただいているので大丈夫だと思う。教育研究活動については火山マイスター制度が発展、継続しているが、加えて少数民族の文化であるアイヌ文化が全面に見えるように盛り込むことが必要と考える。管理・運営体制の一番のポイントは、今まで事務局長が短期間で変わっていくことが問題だったが、この点が改善されたこと。ただ、各地域との温度差が感じられる点が残っている。地域の持続可能な発展とジオツーリズムについては、大地の遺産を商売に使うなどということがいつも話題にでてくるが、温泉はどうなのか。温泉は地下水を掘り出し、使って流すわけで、地球の遺産を使い捨てしているようなもの。そのへんをどう説明するか、皆さんにもお聞きしたいし、現地でも考えてほしい。採石場をどうするかは議論しても温泉をどうするかは、ここであまり議論していない。それが現地の議論のなかでたいへん気になった。私自身の宿題としても残っている。5番目の日本ジオパークネットワークおよびユネスコ世界ジオパークネットワークへの貢献について。北海道には5箇所のジオパークがあり、その中のユネスコ世界ジオパークであるので、アポイと一緒に貢献について考えてほしいことと、たくさんの観光客が来るということを利用してジオパーク活動をもっと宣伝するしくみを作ってほしいことを伝えた。この点については現地の方達も心得ているようだった。6番目の防災活動について。火山マイスターが心得ており、20年に1回噴火するところなのでそろそろ次の噴火に備えて何をすべきか、行政と連携をとりながらジオパークとしても考えていくとのことだった。

委員：まず審査員としての方向性を教えていただいたほうが議論しやすい。

委員長：私としては一応合格という方向で議論していただければと思う。出してきた宿題がこの半年で間に合うかどうかということが議論の対象になるのではないかと思う。

委員：詳細版のほうに風車の反対運動があったが。

委員長：風車の反対運動があるのは知っている。住民の方から手紙をいただいたが、直訴状は個人的に読ませていただき、委員会で取り上げることはしないと現地の方には言った。風車は日本のあちこちにあるが、個人的見解としては、風車はあまり役に立っていないと思っているので是非進めようということには言わない。日本は向いていないと思う。

委員：専門員について追加資料がでているが。

委員長：ネットで今募集をしているのはご存じだと思う。専門員の役割もされている事務局員がおり、博物館も協力をしているし、専門家の協力はあるのだが、専門員を雇用するということは世界ジオパークとして必要であろうと意見は伝えた。そういうことで現在募集中である。専門員というのは島原半島が最初。専門員を雇用するということをひとつの条件にしてもよいのでは、と言ってきたので、各ジオパークでポストができてきた。人材不足や適材適所がうまくできないというところもある中、うまく人材を確保するために給与を上げるなどを検討してほしい。

委員：運営体制が具体的にどう変わったのか。首長会議と推進協議会との関係は。

委員長：首長会議は形式的にはやることになっているがトップダウンではない。事務局長が長期間異動しないのでできるようになったことと専門員の募集をしていること。

委員：事務局はどこにあるのか。

委員長：洞爺湖町。拠点を作るのはこれから。市町村によって温度差があるが、組織としては確立する方向に行くだろう。また、今回の遺跡発掘現場の視察もそうだが、視察のルートが多方面にわたって整ってきた。

委員：青森の縄文文化を含めて世界遺産を狙っているという話はどうなのか。

委員長：その件は別の問題でもあるだろうし、議論しなかった。

委員：マイスターの人達が中心でありガイドの印象がなかったが、去年訪れた時、プロのガイドに学んでジオガイドの活動を積極的にしているように見えた。ジオパークより防災を中心に伝えていこうというマイスターの想いが変わってきているという印象を持った。ジオパーク友の会とマイスターの説明はどのように感じたか。

委員長：次の噴火に備えるための防災強化という面もある。ガイドはそれぞれ植物に弱い、火山には強いなど温度差があるがずいぶん勉強している。専門家があまりでしゃばらないほうがよい、ということとガイドの養成に専門家がどのように関与するかのバランスには問題があり工夫が必要。友の会との関係はうまくいっているようだ。

委員：専門家に異議を唱えられるような専門員を雇用しようとは思わないのか。

委員：専門員の公募要領には、再審査に係る業務で、英語で業務が可能な人、とあった程度なのでとてもそれには応えられないと思う。ここは日本ジオパークとしては合格かもしれないが、ユネスコ世界ジオパークにもかかわらず世界貢献が全くできていない。以前から指摘していることであるが、ようやく審査員を一人だしてくれるようになり、少しずつ改善していくとは思いますが、この点は厳しくコメントしたほうがよいと思う。委員長：国際貢献については、現地でも指摘し、実行すると聞いている。

委員：JICAの研修をしているのでそれでよいと思っていないか。

委員長：JICAの仕事をしているので、もっとアピールしたらよいとは言ったが、それで十分とは思っていない。サミットの会場になった場所でもあるので、地元を意識はある。ジオパークとは関係ないところでガイドの活躍があり、もっとジオパークと連携を深めたほうがよいと指摘した。以上で日本ジオパークの再審査としては合格としたいがよろしいか。またGGNの審査にあたっては具体的に項目を挙げて指摘するということでよいか。

【異議なし】

【糸魚川】

委員：結論から言うと日本ジオパークでよいのではないか。しかし、現地に行って、ここは本当にジオパークなのかという疑問がおきた。2014から問い続けている、「持続可能な地域社会の実現のためにこの地域に合ったやりかたで住民、行政関係者らがともに考え続けているか」という部分が見えなかったという点が大きい。前回のアクションプランや委員の指摘事項についてはそれなりに対応しているし、それ以上の改善もあった。新幹線の開業にもなってジオパークのボトムアップの活動が後手になってしまったのは仕方ないのかもしれない。事務局スタッフは多く同行されるが、地域の人々が来られなかった。行政側の事務局がジオパークを全部担っていると強く感じられた。保全についてはフォッサマグナパーク、ミュージアム等のハードの面での改善が行

われていたことは見本となるもの。フォッサマグナパークは保全と見せることを委員会でじっくり計画して、今年度中に公開になる予定。一方で無形文化財の保全がまだ足りない。保全において一番のポイントはヒスイのこと。前回の再認定審査で一応認めてもらってはいるもののヒスイについてはほぼ何も進展がない。特にヒスイが国石になったことをふまえ、より注目が集まっている時に、海岸にころがっているのは土砂災害で山から崩れてくるので防ぎようがないという理解。しかし、きちんとしたモニタリングがされていないので、する必要があると指摘した。教育については、糸魚川の一貫教育の中で、園児から18歳までジオパークを重要な教育活動のひとつとしてあげているが、深い理解をして活動しているところの紹介は県立海洋高校しかなかった。管理運営体制については、ジオパークの活動を事務局だけで行っている印象が強く、ボトムアップからの積み重ねていくことが必要だ。前回の審査に基づいてつくられた「ジオパーク戦略プロジェクト」があり、いろいろな行政機関の活動を紹介しているのだが、ただ束ねているだけで、全体で議論していないようだし、そこに市民の参加も見えてこない。ツーリズムに関しては、ガイドの会が設立され有料ガイドが活躍している。国際対応についてもある程度の活動をされていると思うし、ジオパーク新潟国際フォーラムがひとつの成果だと強調していたが、UGGとしての価値創造につながったかという疑問。防災・安全については新潟焼山の火山活動が始まっており、火山防災教育の中に学芸員が参加して積極的な関わりをしているところが評価されている。糸魚川としてはこれからセカンドステージととらえ、ボトムアップもじっくりやっていくということでもう一度ジオパークの原点に戻ってもらえると思う。

委員長：香港との具体的な交流についてはどうか。

委員：子供達が行き来している。糸魚川なら香港以外でもできるだろう。

委員長：香港のほうが糸魚川との交流をずいぶん宣伝しているが糸魚川側はあまりアピールしていない。ユーラシアプレートと北アメリカプレートが押し合いをしている場所が具体的に見られる場所は世界的にそれほどないので、そのへんをもう少し強調してほしい。反対側ではアイスランドの分かれているところが見えるので、それとセットにして北半球からみた地球儀をおいたらどうかとアドバイスしているのだが、そういう工夫があまりみられずにもったいない。

委員：結論は再認定だが、課題は山ほどある。

委員長：地元の人が審査に少ししかでてこないのはなぜか。

委員：事務局が、ジオパークとしてはできている、という意識を持っているところが懸念される点。ただ見せるというだけに留まっていた。例えば教育関係者との議論ではなく、特定の学校の先生の話聞いておしまい。プレゼンの時間が多く、質疑の時間が少なく、質問をさせてもらえない。事務局が行政的に行っているという印象を強く持った。

委員長：国の石というのは最近耳にしたのだが、誰が定めるのか。日本鉱物科学会。

委員：注目されているし、宣伝もしているので保全の必要性をさらに認識して、モニタリングもするべき。ボトムアップで地元の人がヒスイの有限性を認識してほしい。過去に有限性について簡単に試算したものがあるが、もっと根拠のあるものにしていく必要がある。

委員：ヒスイの文化について。フォッサマグナミュージアムの隣に長者ヶ原考古館があるがそこの連携はとれているか。

委員：今はずいぶん連携はとれていて、文化の重要性は認識されている。フォッサマグナミュージ

アムと合わせて概要がわかるようになっている。しかし、ヒスイそのものの現状についての説明が十分ではない。

委員：JGNでもESDが重要視されているが、先史遺跡は最高の素材となる。洞爺湖でも北小金貝塚があったが、もっと盛り込んでいったほうがよいと思う。

委員：会長によると、ヒスイが国石になった理由は、日本中に散在しているから、だそう。もう一度日本中にヒスイ文化を糸魚川から紹介するようなプログラムを実施してもよいのではないかと、と言っていたので報告書にはその点も加えたい。

顧問：糸魚川ジオパークができた当初は地元の商工会議所の若手が積極的だったが、最近は大会で見かけない。

委員：実際に商工会の会長は現地審査に出てきているし、道の駅マリンドームでは熱く語ってくれるような人もいる。そのような人達をひっぱりだしてジオパーク運動の先頭に立たせるのがよいのだという価値観を事務局が持っていない。糸魚川学で教わった子どもたちが社会人になっている。そういう人材の掘り起こしをしてセカンドステージに臨むということを宿題として指摘したい。

顧問：ガイド料を値上げしたと聞いたがどれくらいか。

委員：詳細はわからないが、お客から安いと言われたため値上げをしたという。それだけ認められているということ。

委員長：結論としては、課題をたくさん出して合格でよいのか。

委員：それで良いと思うが、今度、世界の再審査があるので委員会から3つの地域については世界の審査に向けてわかりやすく課題の提示が必要だと思う。

委員：JGCの審査とGGNの審査についての議論がなかったので、JGNの再認定の書類だけでした。前回のGGNの指摘事項は詳細版のほうに記載されているが別にまとめたほうがよい。

委員長：具体的な指摘事項をまとめてください。

委員：前回のGGNの指摘事項にはヒスイは出ていないが、JGCとしては問題として指摘しなければならないと思っている。指摘されていた8項目はそれぞれ改善されている部分もあると思う。

事務局：審査の位置付けとしては、GGNの審査の一年前の審査という位置付けか。

委員：GGNの一年前の審査ではあるが、JGNとしての再認定審査でもある。JGNとしての審査の結論を出して、二次的にGGNのことについて指摘事項をフォローする。口頭議論でとどまっていたので。

事務局：先日池袋で行われたミネラルショーで糸魚川の業者は世界ジオパークだと言ってヒスイを売っていた。この点は厳しく書いていただきたい。

委員長：ジオパークと経済活動の関係を一度整理し、ガイドラインが必要であると思う。

委員：それについては、文化だ、と逃げたままになっているので。文化を大事にしつつ理解してもらい将来的には販売をやめてもらうという努力をしてもらわないと困る。

委員長：そのような業者はジオパークのメンバーではない、とさらりと逃げているが好ましいことではない。

委員：新幹線の開業のほうでジオパークとしても対応することが多かったためある程度は仕方なか

ったかもしれない。

委員長：焼山の噴火の問題は具体的にはないか。

委員：一番近い地域は防災意識が高い。

委員長：雪深いスキー場で、スキーヤーは注目する場所。

委員：事務局としてもっと対策に取り組むべきと指摘した。

委員長：それでは課題を指摘することにして合格でよいか。

【異議なし】

【島原半島】

委員：現地調査の予定は11月4、5日だったが、柚洞さんと石川さんはできるだけ多くの人の声を聞きたいということで6日に自主的に調査した部分も含まれている。いわゆる日本ジオパークの立ち上げにできた老舗のジオパークで再認定審査の現地審査は今回で2回目ということになる。総合的な結論は公開版に2つのケースで書いてある。若干辛口で評価している。11月4日に協議会の関係、自治体、事務局、ガイド、ジオパークのサポーターである一般市民から話を聞いた。初日に協議会のほうから前回再認定審査の際に指摘された事項についてひとつひとつ回答していただき資料を作成していただいた。この4年間でどのような事業がスタートしているかも書かれている。評価できるところは多々あるが、前回の指摘事項に関して動いていないところも多くみられた。見学地点に関しては協議会のある雲仙岳災害記念館、2014年度以降新規事業である普賢岳の砂防指定地のジオサイト、雲仙地獄、諏訪の池といったジオサイトを中心に調査した。合間にジオサポーターのお店も回った。文書には、前回の指摘事項に対しての対応がそれぞれ記載されているのだが、実際訪れてみると、前回の指摘事項についてあまり改善されていないということが判明した。報告書内のジオサイトと保全について。ジオパークの地名を明記しただけの看板が目立ち・・・と記載した。例えば龍石海岸という地名だけを書くのではなくストーリーのタイトルなど、分かりやすい看板にするべきだと指摘されているが、全て整備がされていない。ジオパークの考え方として、ただ火山公園ということではなく大地の公園という形になるように見せ方を工夫してほしい。まだまだ見せきれていない。考え方において遅れているのではないかという印象。2番めの教育研究活動に関しては新規の活動も含めてかなり小中高校を巻き込みながらやっていた。観光については少し弱いのだが、教育観光、修学旅行の誘致を観光関係者が行っていた。前回より最も改善されていない重要なところは3)と4)のところ。特に管理組織や運営体制のところの問題がある。島原市、南島原市、雲仙市の三つの自治体で構成しているが、自治体間の温度差が解消されていない。また協議会の事務局体制については、ひとりの専門員に頼り切っている状態。今回の再認定審査の事務は、全てその方以外の人にやってもらったという話だったが、再認定審査だからというのではなく、普段の運営がその方がいないとまわっていかないという状態では問題であり、改善されていない。ジオツーリズムのガイドについて。ジオガイドの研修や組織体制をたてなおすという前回の指摘事項について全く改善されていなかった。調査中、事務局の方に外してもらい、ガイドだけヒアリングを行ったところ、事務局に対する不満があることがわかった。ガイドだけの組織を作るということもできていない。ガイドが各人でひとりの専門員とコミュニケーションをとりながら協議会もしくは観光協会から仕事をうけたりしている。

他のジオパークではガイドに工夫がみられるが、残念ながら島原半島のガイドは工夫に欠ける。講習や認定は行っているということだが、ガイド同士の横のつながりがつくられていない中でお互いにスキルをどう上げていくのか不安を感じた。その他、国際対応については済州島や香港のユネスコ世界ジオパークと姉妹提携が行われているしガイドや協議会の方達が頻繁に往来しており、積極的に活動している。防災・安全に関して。今回、砂防指定地に入った。条件付きだがジオサイトとして見学できるような場所で、地元の人々の防災教育に役立てており、意識の向上が図られている。詳細版 29 頁に現地審査の結論を書いている。「ジオパークを目指す地域は、持続可能な社会の実現のためにジオパークとしてその地域にあったやり方で住民、行政、研究者などの関係者が、ともに考え続けているか。また、そのために、これまでのやり方を変える覚悟があるか」という視点に立って審査した。長い間ジオパークをやってきて、ひとりひとりがジオパーク活動を通じて何をを目指したいのかが、自治体、事務局も含めてシェアできていないということがたいへん印象的だった。仮に今回、再認定になったとしても、4年後に改善されているのかという点において不透明。どちらかに結論を出すにしても、もう少しジオパーク全体で現状をサポートしていくことも必要ではないか。そこで結論を2つ用意した。地域のジオサイトを活用した教育活動が盛んに行われているし国際的な交流も非常に積極的になっている。世界としての活動はしている。また、サポーター制度とあって、協議会に入っていない方でもお店の方が積極的にジオパークを宣伝したりジオグッズをつくったりということがいろいろな地域で見られた。特に女性の活躍が目立った。これらの点は高く評価できる。事務局体制およびガイドの部分では不安が残るが、ジオパークの輪の広がりという点でサポーター制度が今後の改善に役立つと期待できるとして再認定するというケース。一方、再認定されなかった場合としては、教育活動や国際交流はうまくできているが、地域全体での情報共有が不足している。ジオパークを通じてこの地域をどうしていきたいかが関係者の中で共有されていないということで前回の再審査の指摘事項に何らかの対応はしているのだが、事務局体制の改革の未着手やガイド団体が組織化できていない点で根本的な解決がみられない。取り組み全体を通して専門員一人に対する依存度がかなり高い点も問題である。以上のことから条件付きで、という形で原稿は用意している。

委員：先生個人としては？

委員：いろいろ議論したが、イエロー。宿題を出した時に事務局体制とかガイドの組織は、改善してくれるのだろうかという不透明さがあった。

委員：古川会長とその点はどう話し合ったか。

委員：進んでいないことは認識されている。島原市長は長年ジオパークに携わっておりその価値を認識している。そのことを住民にどう繋げていくかという点は事務局任せになっている。隣の南島原市長や雲仙市長同士で議論したり自治体の職員間で議論したりという気運は薄いように思われた。

委員：市長さん達は最後の講評の時には来られたのか。イエローを出すと、頑張るようになるという印象だったか。

委員：皆さん来られた。首長らは否決されることは想定されていないようだ。改善するというお答えはいただいた。事務局に関しては、厳しく指摘したこともあり、イエローになっても仕方ないかもしれないという自覚はある。スタート当初のジオパークであり、ユネスコ世界ジオパークで

もある、ということで、果たしてイエローを出してよいものか、または出したほうが他のジオパークのためにもなるのではないか、こういう状態でもジオパークをやっているという事例を出してよいものか、ということ考えた。

委員長：悪しき前例とあったのはそういう意味か。

委員：今後4年で指摘事項に真摯に向き合ってくれるのかが、見えない。

委員長：3人の市長の温度差を具体的に感じたことは。

委員：雲仙市長は冒頭、渡辺センテンスに関して抵抗がある、と言っていたが、全国大会で各ジオパークと交流する中、改めてジオパークの活動は大事だということを認識した、と言っていた。かなり前向きに変化している。南島原市長は、ジオパークに関しての期待や認識についてはよく確認できなかった。

委員長：国際ユネスコ会議を行った時も温度差があつてたいへんだった。

顧問：その時からコミュニケーションのなさが特徴的だった。例えば世界の現地審査員が行ったらガイドさんは本音を言えない。すると、きれいごとだけ言って通ってしまう。もし、イエローを出すなら、来る審査員に事前に問題点を言っておかないとよくわからないまま通ってしまう可能性がある。

委員長：それは大きな問題だと思う。

顧問：世界の審査は、知らない国の言葉で通じない人のところで行うので分かりづらい。

委員長：ガイドの組織ができないという理由として、個性が強すぎるガイドがいるというようなことはないのか。

委員：その指摘はあった。各地域で個性の強いガイドがいるということは事前に伺っていた。情報交換の場がなかったり、スタンダードがわからなかったり、ジオパーク全体としての説明がどうということなのかということの説明をしっかりうけていないような印象を受けた。熱心なあまり、独走するということがあるにしても、それをどのように個性として活かし、良いガイドをしていくかという議論がされていない。集まる機会もない、とガイドが言うので、事務局に頼るのでなくガイド同士で組織を作ったらどうかと話をした。

委員：合格、不合格と言っているが、そうでなくて、課題を4年間で直せるか、抜本的に解決できるのか、あるいは2年間で緊急的に変えなくてはいけないかということらどと思う。話を伺っているところ、もし4年間認めてしまうと、ゆっくり直せばよい、これでよいのだという気持ちで結局できないままになってしまうのではないか。2年間にすれば危機感がでてくるので、やはり、2年間で改善して下さいという条件付きのほうがよいと思う。

委員長：合格するが条件を付けるということか。

委員：フォローアップが必要だとのことだが、具体的には？

委員：学術関係者は問題点については特に聴くことはできなかった。学術関係者の影はなかった。フォローアップについては、ガイドの組織化をしていくというところで、いろいろなジオパークとスキルを交換できるような、自分達のガイドを客観的に見られるような場ができればと思う。事務局体制については、自分達の役割が何なのかということがあまり分かっていない。事務局の運営に関する、講習会のようなものがあるとよい。

委員：報告を聞いて、専門員から聞いていた話と違うと感じた。専門員の話によると、事務局の人

員が異動でよく変わり、全体がわかっているのが自分だけになってしまう。来る人も腰掛け的に捉えているところがあるようだ。ガイドについては、ばらばらだという認識は十分に持っていて、会合を開いてもなかなか集まってくれない、とのことだった。見るサイドによって捉え方が異なるという印象を受けた。

委員：事前に専門員から話は聞いており、その上で審査には行った。改善する余地はあると思う。

それぞれがばらばらに活動しているのは、ジオパークが大事だということを思っていないから。単に地質の説明をしている場がある、というのではなく、ジオパークは何なのかということが地域の人に理解されていない。老舗で手本になるべきジオパークでそのようにされたら、寂しい。

委員：日本のジオパークの基準に達していないというわけではない。そのへんが難しいところ。最初のユネスコ世界ジオパークなので教育的にイエローを出したいが。

顧問：GGNの審査員にその理由を説明するのはとても困難。

委員長：以前の委員会でイエローカードは使わないという申し合わせがあったかと思うが。どのような表現を使うか。条件付きという言葉になったと思うが。イエローカードという言葉からの誤解を防ぐということをお話したと思う。

委員：事務局長が責任をとるような体制にしなければいけない。そのような人事を来春するとか。

顧問：事務局長が住民にジオパークのことをしっかり語れる人でないといけない。

委員：そのような人事を行わないと条件付になるということで今我々が判断をするという方法もある。それができるのなら4年後でもよいという話をしても良いと思う。結局のところ、一人の専門員に負担が集中しているのが問題。

委員長：さきほどの洞爺湖有珠山と同じで専門員を職員として配置することが大きな条件となる。条件付とするにしても、その理由を地元で明示することとGGNのほうには分かりやすく説明してもらわないと意味がない。どちらもだめになっては困る。

委員：専門員を支える事務局体制を来春までに実現できれば、GGNの審査員が来たときに、JGCとしては条件付で出したがその時の問題点は解決している、と説明できる。

委員長：今の専門員を支える方向で言わないと、専門員の配置換えをすればいいのだと勘違いしかねない。

委員：地元は初めて正規の専門員を雇ったことを誇りにしている。

委員長：それは大いに自慢してもらって、自慢に見合ったものにしていただきたい。職員を恒久的に配置し、GGNの審査に耐える人事配置を短期的に行う準備をする条件ならよいと思う。

委員：人員の使い方が下手。サマースクールを行ったときも驚いた。ひとりの専門員になんでも任せている。本来の組織として成り立っていない。

委員長：また、ガイドの組織化を3市で行い、きちんとした研修を受けながらガイドの本来の仕事ができるように努力するという条件として必要であろう。これはゆっくりでもいいが、事務局体制は急務。それが半年くらいで目処がたつなら再認定でよいのだが、それができなければユネスコにうまく説明しなければならない。

委員：今の専門員は配置換えも打診されているようだ。

委員：専門員は専門員として活動すべき。

委員長：専門員を支える体制を指摘する。

委員：支えるというか使う体制が必要。

委員長：使うというと、トップダウンが強調されて難しい。

委員：会長が事務局長にきちんとマネージメントができる自治体のエース級を置かないとだめだと具体的に言って、それができなかつたら不合格。

委員長：勝山で一度条件付きを出した時、そのようなケースがあった。それでたいへん変革をした。

どうするか。まず、会長と副会長にしっかりとガバナンスを要求しますか。それと専門員のこととガイドの組織化にじっくり取り組むこと。

委員：事務局長は自治体の職員なので変わる可能性がある。

委員長：条件付きで合格とするとし、現地審査を担当した JGC 委員にフォローしてもらおう。

委員：条件付きとしたら期限は。

委員長：基本 2 年で再審査する。

委員：ユネスコの再審査をうけるときは来年の 2 月 1 日までに現況報告を出さなければいけない。

島原も出さないといけない。その内容はこの委員会でチェックしなくてはならない。JGC の審査結果に対しての見通しを書かないといけないだろう。

委員：その時点であればなんらかの人事は内定しているので予定を入れて書いてもらうことを期待する。

委員長：グリーンにするという意味でおっしゃっているのですね。

委員：グリーンでなく、それが 2 年の大きな条件で、条件付きの条件をひとつクリアしたということ。

委員長：文書に入れるにしても口頭説明が必要になる。

委員：JGC が条件付きで結果をだし、もし GGN が通ったとしたら、日本もグリーンになったと判断してもよいと考える。

委員：今おっしゃったのは、もし GGN で合格がでたら、JGC の結論は無条件に合格になるということか。

委員長：いえ、そのような連動はしない。

委員：いや、GGN の認定がされた場合はその前年に審査をするということをしたことがあるので、GGN の再認定の前年に JGC の審査をすることを認めることもできる。JGC が出した条件をクリアしていれば我々としては認定できる。来年の提出までに方向だけでも決めて JGC の書類が書ける根拠を出せと。GGN が合格を出したら GGN の再認定の前の年に JGC の審査をする。

委員長：いずれにしても連動はしない。

委員：いや、これまでもしている。

委員長：自動的ではなく議論して決めないといけない。条件付きで認めるが、口頭でかなり詳しい説明を伴う、ということにしてよろしいか。2 月 1 日というのは厳しいが、そのような認識でやってもらわないと。事務局に現地に説明しに行ってもらおう。

委員：言葉上イエローでもそうでなくてもよいのだが、2 月 1 日の提出までに努力してだめなら、JGC としては事実を書いて出すしかない。その場合 GGN でもイエローになる可能性は高いと思うが。

委員長：我々としてはしっかりフォローしていくという方向でよろしいか。

[異議なし]

【隠岐】

委員：隠岐世界ジオパーク空港に降り、隠岐自然館、西郷フェリーターミナル等を見てきた。まず、施設の可視化について。看板が少ないという前回の指摘があったので最初に記載している。フェリーターミナルが島なのでジオパークに来たと実感できる良い環境だが、改善の必要もあり、2018年に実行できるようにその改善計画が出されている。国立公園であるという利点で看板が整備され、ジオパークがわかるようになっている。これには島根県の協力がうまくいったようだ。ハワイについたらレイをかけてもらうような、隠岐ジオパークに来た、という嬉しい実感がわくような仕掛けをお願いしたい、と伝えた。そのようなことができる環境にある希なジオパーク。ジオサイトの保全のテーマは、「大陸の島々から大地の成り立ち」、「独自の生態系」、「人の営み」、からより絞って、「日本海の孤島が生み出した荘厳な大地と特異な生態系、そして人の営みが織りなす景観」と変更されて伝えたいことは明確になった。環境省隠岐の自然保護官事務所もあり保全については積極的に行っており、美しい景観を保護されていると感じた。問題は、まだ地学的な説明が弱いと強く感じた。いろいろな誤解や間違いがある。ガイドのカルデラについての説明を聞いて、深く説明できていないので日本のカルデラについてもっと勉強してほしいと感じた。地学的知見も含め認定当時に努力された時から学術的な進歩が少ない。若い研究者を育てたり研究支援をすべき。設立当時の大学等の協力を得て作ったものから進展がないので研究支援体制をもっと充実させてほしい。教育活動についてはかなりしっかり行っている。管理体制についても隠岐4町と県がしっかりしている。外部との交流関係もうまくいっている。実際、研究員の待遇についてはまだ問題がある。これはジオパーク全体の問題でもある。書面には待遇改善の必要性を書いてある。全体構想も明確にまとめられており共有されており、管理組織・運営体制については問題ないと考える。ジオツーリズムについて。14万人の交流人口が目標数で、これは受け入れ可能人数の75%になる。15万人という数字もでてはいたが、かなり多い数字になる。科学的知見をガイドに持ってもらえる体制を作ってもらいたい。現在のガイドは一部に問題がある説明をしていた。国際対応について。ミシュラン、ロンリープラネット等のガイドブックに載っているの外国人が多い。4島各所に外国語対応の職員が駐在し、フランス語圏からの訪問者にも対応できるようガイドシステムの開発を進めている。結論としては、指摘事項についてはずいぶん改善されてきているし、外国語強化もされ、事務局もしっかりしてきたので、地学的な知見を充実させることを指摘して再認定してよいと思う。

委員：全国大会では隠岐だけでやっているような印象があったが。学術的な面で進歩がないというのも内向きな姿勢の表れではないか。

委員：自分の発想で意欲的に活動しているガイドの人もいる。ガイドの中にはIターンとあってよそから来た人も多い。島根県もIターンを推奨し、隠岐は良い所だというイメージを作っている。良いコンテンツを用意してあげれば、例えばカルデラにしてももっとおもしろいガイドができるように勉強することができる。

委員：ガイド達はやってきてよかったという自負があるが、向上しようとする意識はあるのか。

委員：事務局長は認識している。既存のガイドにジオ的要素を加えてもらうのではなく、若い意欲

的なガイドもたくさんいたので期待したい。

委員長：4つの島の温度差はあるか。

委員：西ノ島だったか、人口も少ないのでまだまだというところがある。また海士町が個性的だが、問題があるところはない。

事務局：学術的なところは、ある程度指摘はした。物理的に不利なところがあるので研究者に来てもらうなどの必要性は指摘した。専門員の待遇を良くし、研究にもっと専念できるようにし、内部で研究情報を更新していくことができればよいのではと指摘した。島同士の関わりについては最低限の情報共有はできている。海士町のような独創的な試みはそのまま活かしつつ、協力的にもなっており、前進はみられる。

委員長：かなりの前進だ。

委員：隠岐島前のマグマ成因について論文を昨年国際誌で発表した。2014年の火山学の雑誌にも最近の研究論文がある。それを現地に伝えているはずだが、フォローしてくれていない。

委員長：学者の論文はすぐにはフォローしてくれない。

委員：研究に関しては、黒曜石の関係で発掘調査に入っているのだが、ジオパークとしては見えてこない。そのような研究をどう扱うかも考えてもらいたい。

委員長：古民家、歴史の研究でもワークショップが行われているし、養老孟司も昆虫採りに行っていたりする。いろいろな研究がされている所なので、ジオパークという視点でもっと科学者に来てもらいたいということはずっと言っている。

委員：住民の方々の意識はどうか。

委員：一般住民だと土産物屋から話を聞いたが、観光地では問題はない。

事務局：狭い地域なので、顔見知り。事務局長がジオパークをやっていることも知っている。良い関係は築けていると感じた。宿屋、旅館がジオパークを売りにして積極的にやっているかというところ、それほど強くは売り出していない。一般の人は、ジオパークは隠岐の行政の事業としてとらえている。

委員：どれだけジオパークの活動をしているかという当事者意識についてのモニタリングはしているか。

委員：ジオパークを軸にいろいろなものを考えているというのは見えた。国立公園でもあるし、浸透しているのだと思う。新しい価値を見つけて説明したいということも住民達にはある。隠岐は日本と世界をリードできるジオパークだと思うし、そうなるべきと伝えた。課題はあるが、地域が一体となってやれるジオパークでもある。

委員：環境省の職員も数年前にはいなかった。島民も国立公園という認識もあまりなかった。環境省がジオパークの看板に協力したり、国立公園とジオパークで今はお互い良い関係になっている。

委員長：国もだが、世界ジオパークになることによって県も目を向けるようになったし、4島が連携するきっかけにもなった。世界になってからも住民は自然体に活動している。世界をリードしていくべきというのは当たっていると思う。

委員：隠岐の島町長が退任とあるが、交替したのか。

事務局：協議会としての独立性は気になった。

委員：次期町長もジオパーク推進については理解しているのですね。

事務局：はい。

委員長：特に厳しい問題もなかったようなので合格ということでよろしいか。

[異議なし]

【南アルプス】

委員：2日間で約100kmまわった。事務局によると全地域をまわったのは初めてではないかとのこと。気になった点は、4市町村あるのだが、4つのジオパークを見ているように感じた。100kmの間に3つ峠がある。たいへんな峠なので、これを越えて交流するのは非常に難しい印象があった。保全については、地域の人が総出でジオサイトの保全やガイドにあたっているところを何箇所かで拝見した。板山露頭という中央構造線の露頭がある。あまりにも積極的すぎて、見えやすいようにするためきれいにクリーニングするので雨が降る度に崩れてしまい、またクリーニングするということをしていた。それは保全でなく破壊になるのでやめてほしいと指摘した。それほど住民の人が積極的に関わっていた。教育研究活動について。青少年自然の家、高速高校、小学生から高校生までジオサイトを活用した教育を行い、特に高速高校ではカリキュラムの中でガイドになる講習会を高校2年生から行っており、2年生でガイドに認定されると3年生の時に2年生にガイドのやり方を伝えていくという試みを始めた。管理運営体制について。前の審査で、きちんとした事務局を置くよう指摘され、現在は事務局を置き、4つの市町村が関わっている。ジオツーリズムで登山者をどのように活かしていくかという議論が以前にあった。スーパー林道で登山者が利用するマイクロバスの運転手がジオサイトのガイドも兼ねている。その結果、中央構造線博物館に登山者がどんどん来るようになった。ガイドの説明を聞き、登山道にある看板を見て、博物館を訪れるようになった、というたいへんよい話を聞いた。看板にはあまり詳しいことは書かれておらず、博物館に誘導するような流れを作っている。国際対応についてはまだまだではあるが、パンフレット、看板等に英語で併記されていたところもある。防災・安全について。地震火山こどもサマースクールを開催したり、地すべり地域なのでそのようなパンフレットを配布したりジオサイトに行く道への保全、安全活動を地域の人と一緒にやっている。なぜ4つのジオパークがあるように感じたかということと基本計画が非常に具体性に欠けている。今までの活動は、前回の指摘事項についてアクションプランを作り実施しているのだが、基本計画については概念的なものだけで、具体的なものが書かれていない。予算関係も、各市町村に担当を決めると市町村の予算内でやるのでジオパークとして全体の予算は組まれていないという問題がある。活動としては4つ合わせると非常に良い活動になっているのだが一体感という視点でみると、中央構造線博物館の展示内容にしても大鹿村の展示に限られている。学校教育は伊那市が担当しているが、大鹿村まで活動がいつているかということとそうではない。東京や名古屋の生徒を招いて交流をしているが、隣の町村が参加していない。これらのことは今まで委員会からも指摘されていない。これを課題として指摘していけば、協議会の白鳥会長もやると言っていたので、課題をクリアすれば次4年後の再審査までに達成できるのではないか。

委員：現況報告のほうに少し触れていたゼロ磁場水については、以前からサイエンスではないので問題視していたが、看板のほうにはゼロ磁場のことはサイエンスではない等の説明が明確に書いてあるのか。

委員：ゼロ磁場には降りなかった。行くには、峠の麓で降りてマイクロバスに乗り換えて行かないと入れないということだったので、見なくてもよいとした。中央構造線の地形が非常によく見えるところにゼロ磁場があるのだが、ジオパークの看板はゼロ磁場については触れていない。

委員長：私は以前、看板で磁場について説明するように、と言ったがなかなかできない。問題なのは、宿に行くとゼロ磁場の水を宣伝するパンフレットが置いてある。全国大会でも外の店でゼロ磁場水を売っていた。こういうことをやっている以上、認定したくない、と言った。

委員：前回審査した時の課題として、それぞれの自治体が活動していてまとまりに欠けていた点がどのように改善されていたか。またジオサイトにどう行くのかの案内が不足していたことも指摘されていたが、どのように改善されたか。

委員：事務局関係は非常に連携がとれてきたと聞いた。4つの市町村の担当者からも同様に聞いた。拠点施設として長谷ビジターセンターを作り、そこに大きな分かりやすい看板を作った。また、ビジターセンターの中に、プロジェクターで床にジオパークが写る展示をして、ジオパークの場所がわかるようにしていた。

委員：前回 JR の高遠駅を降りた時にジオパークにはどう行けばよいのか全くわからなかったのだが、今回はどうだったか。

委員：直接行ってはいないが、対処していると聞いている。

顧問：全体のストーリー性が心配。露頭があるところは分かりやすいが、伊那はどのようなものをストーリーに入れているのか。高遠城とか史跡もいろいろあるがジオパークのストーリーに入っていないように思う。2:03.37

委員：高遠城についてはジオパークということでガイドから説明があった。盆地のかつての産業である彫刻（石工）についても説明していた。化石関係も分かりやすく展示を含め説明していた。

委員：エコパークとの関係は。

委員：ジオパークを中心に4市町村ともやっていくということで合意している。エコパークは山梨県も入っており、範囲が広いので、ジオパークは中央構造線をメインにしたいとのこと。中央構造線の両側もジオ遺産としてすばらしいのもっとアピールしたらいいのではないかと指摘した。

委員：山梨、静岡も入って南アルプス世界自然遺産登録推進協議会というのがあるが。

委員：中央アルプスジオパークのほうを今後は考えたいとのこと。

委員：中央アルプスについては他に何かあったか。

委員：特になかった。

委員長：それでは合格ということではよろしいか。

委員：ゼロ磁場については一言入れたほうがよい。

委員長：それは言い続けていかないと。せめて積極的な宣伝だけはやめてほしいが特に触れなくても。ただ、磁場とはどういうものかという説明する責任はあると思う。それでは、合格ということで次に。

[異議なし]

【白 滝】

委員：2014年の再認定審査で、特に運営組織とマスタープランの問題についての指摘によって条件

付再認定となったということでこの2点を中心に見てきた。まずその2点について最初に説明する。前回指摘事項の対応状況のうち、組織機構の見直しについて。前回、運営組織がうまく機能していなかったという指摘があり、2015年の6月にこれまでの協議会を解散して、6月末に新しい協議会を立ち上げた。町内の関係団体によって組織されている協議会と実働部隊となるワーキンググループは会長からの委嘱で、白滝遠軽町にある生田原、遠軽、丸瀬布、白滝のそれぞれの代表、計23名からなる。それを横に貫く形でツーリズム、教育、保全部会が設置されて事業計画提案、推進等を行っている。その他、学術顧問や関連する組織、研究者等が支援、協力するという形になった。特にワーキンググループが中心となってボトムアップの活動がされており、大きな改善で評価したい。ワーキンググループが中心にマスタープランの策定をすすめてきた。月に1回程度13回にわたる会議、現地調査、非常に手間のかかるやり方をあえておこない、なぜ条件付きの再認定になったかよく掘り下げて考え、マスタープランを作成した。ボトムアップの形で良いものができたと考える。この2点については改善されてきたと評価する。名称とテーマについて。以前、遠軽町全体の活動ということで遠軽ジオパークにしたほうがよいのではないかと、本委員会から指摘された件についてはマスタープラン策定の際にも議論された。このジオパークで最も価値の高いものとして黒曜石が再認識された。さらに、そこから白滝ジオパークという名称がふさわしいと再確認された。保全については、露頭が国有林内にあり、保護はしっかりしている。体験学習で黒曜石を消費するようなこともされているが、かつて採掘した在庫を活用したり、ガラスの代用品を開発することで保全はされている。在庫について無くなった場合どうするかという課題はあるが、露頭から落ちている黒曜石を事務局が管理しながら、実際に現地に採りにきてもらい価値、保全を確認しつつ、博物館が体験学習に使用したり研究者が利用することを考えている。また林野庁にも理解をもらっているとのこと。教育については、研究の助成事業が始まった。研究の成果については地元で講演会を行い、風穴周辺に植生したコケモモの研究を地元に戻し、地元のマスコットキャラクター作成にも結びついている。小学校では石育の授業を行っている。遠軽高校でのオホーツク風土研究などについては以前より高い評価を受けており継続的に行われている。ジオツーリズムに関しては、遠軽ジオクラブというガイド団体がNPO登録を申請しており、今後のジオガイドの中心的な組織になる。ガイドの人数はまだ多くはないが、むやみに増やすことはしないが今後着実に増やしていくことを考えている。国際対応・ネットワーク活動については、2015年に保全をテーマとしたJGN全国研修会を開催したり、北海道ブロックでの学習交流会をするなどしている。防災については、遺跡は水害が少ない場所にあるなど、湧別川の氾濫と遺跡との関係を教えたり、遠軽高校は水害のある場所でもあるので過去の歴史と絡めての教育をしている。卒業後、他の地域にでてしまう生徒もいるため、他の地域でも起こり得る災害についても教育が行われている。中心となって活動しているのが、白滝と丸瀬布の地域。特に問題となる点は、遠軽に行った際にジオパークの場所だということがわからないこと。可視性に問題がある。遠軽町全体のストーリーの構築も課題。それでも前回の指摘事項については改善がみられているので、さらに発展させていただくということで現地審査員3名とも再認定でよいと考える。

委員長：黒曜石があるところは鍵がかかっていたと思うが今でもそうか。見学者への対応はどのようにするのか。

委員：ジオパーク交流センターのほうに申し込んで林道を抜けて入る。ツアーに参加する場合は、ヒグマ、マダニ、スズメバチといった危険性についての講義を聞くことになっている。

委員：遠軽の町の規模にしてはジオパークの投資が大きい、住民は本当に納得しているのか。ポトムアップの感覚はあったか。

委員：ワーキンググループで話しをしていたという中で、白滝地区の方が全町での活動というなら遠軽の名称のほうがよいのではないかと、一方で遠軽地区など他の地区の人が、この地域全体をつなげるなら黒曜石を重視して白滝ジオパークにするのがよいという意見が出るなど、全町に意識を広げて考えていると感じた。

委員：ワーキングチームがうまく機能し、計画を立てたり、名称やジオストーリーを考えたりしている。受け皿としての協議会も以前の個人が集まって作った協議会から新しいものになった。協議会は町内の団体組織の長で構成した。これまでの個人のほうはガイドグループのNPO組織に移ったように受け止めた。住民全体が参加しているというレベルには達していない。体制はできたとは思いますがまだ出発点。

顧問：町の人が鍵を開けてくれた。NPOになったということだが、財政的に心配。ガイド料があまり高くなかったし、見学者もあまりいないのでは。

委員：ガイドグループのNPOはまだ申請したばかりで動いていない。実際のツアーは事務局が受け入れて案内するという形。ガイド養成をしようと思気込んではいるが、見学者があまりいないのでそれほど焦る必要はない。丸瀬布は憩いの森があってキャンプ場がありバンガローもある。電柵をめぐらせてヒグマが来ないようにして自然と共生している。とてもすぐれた場所。昆虫館とジオパークがうまく連携するようになってきた。昆虫館でもジオパークの看板を掲げてくれるように話しをした。入り口に等身大の哀川翔の案内板があり、彼のカブトムシが飼育されているので、それを活用してジオパークを宣伝して欲しいと話した。これから伸びしろのあるところ。

委員：遠軽高校でオホーツク研究をされている先生がいたが、組織体制をつくる上で、専門家が排除されるようなことはなかったか。

委員：ない。遠軽高校の学生は地元はかなりもどってくるようだ。

委員長：特に他になければ合格ということでもよろしいか。

【異議なし】

【伊豆大島】

委員：2年前に条件付再認定になった。その条件は3つある。ひとつは組織体制の強化。ジオパークを町の基本計画の中に入れてほしい。ジオパーク自体の計画を作るべき、という3点。まず、組織体制。2015年16年と一人ずつジオパーク専門員を配置した。さらに観光協会から兼任職員を一人配置し、事務局を強化した。最終決定機関である町長のいる推進委員会、その下に企画運営部会、さらに具体的なことを検討するため環境、防災、観光ガイド、産業商工教育文化の4つの専門部会を作った。役場の各課やガイドや、婦人会も参加し、町をあげて取り組むようにした。以前のアドバイザーに関しては学識委員として専門部会に入ってもらっている。組織体制、事務局体制に関しては相当の強化が図られていると理解した。町の計画でのジオパークの位置付けについて。第六次大島町基本計画の中で、ジオパークの理念に基づく街づくりをするということ

明確にした。ジオパークの基本計画の策定に関しては今年の11月に伊豆大島ジオパーク基本計画を策定した。いろいろな人の意見を聞いて簡潔にわかりやすくまとめた。保全について。環境省の予算を使ってジオパーク「保全活用計画」を今策定している。環境省のほうでもこのジオパーク保全活用計画を国立公園の管理運営計画に反映させる形で一緒に活動するという事だった。研究者を支援する調査研究支援窓口を作り受け入れ体制を整えている。ガイドについて。もともとすぐれたガイドが評価されているが、伊豆大島ガイド認定制度を作り今年35名の認定ジオガイドが生まれた。有料のガイドになりたい人に関してはどうするのか、という質問には既に活動しているガイドに同行することでスキルアップを図る。実際にガイドを体験してみたが、目の不自由を体験するアイマスクをして歩くということをやリ、恐怖を感じたが、障害を持つ人の理解が深まるのでよいことを考えていると思った。学芸員の人と言うには、最初ジオパークは胡散臭いと思っていたそう。だが、今は理解してガイド養成に協力している。国際対応、看板については遅れている。看板は今年度中に設置計画をすること。防災・安全について。今年、防災避難30周年で、経験者の島民がパネリストになって体験を語っていた。塩の会社の社長が進行役。生々しい体験談を短い時間に興味深く語っており、よい防災教育だと感じた。前回指摘されたことにしては真摯に取り組んでおり、進展もみられる。郷土資料館を復興復旧の観点で移転するように言われている。その時にジオパークの拠点と位置付けるとのことだった。よって看板など課題は残っているが、指摘された課題の多くは改善されているので問題なく再認定でよいと考える。

委員：東京都との関わりはどうか。前回のジオパークの時は東京都はジオパークに対して「無視」の状態だった。

委員：大島町長が最初から参加し、協力するとのことだった。オリンピックに向け国際対応を考えているところだが看板、標識なども東京都として対応すること。災害時に緑化したところを防災教育の場として利用する。

委員：そこにジオパークの看板も設置されますよね。

委員：都、環境省との関係はうまくいっているようだ。

委員：町長が変わってから都は積極的に協力するようになった気がする。東京都の中長期観光計画に島嶼部の観光の柱としてジオパークが挙げられている。東京都も予算をつぎこむのでは。オリンピックでは多摩や島嶼部にいかにお客を呼び込むかという政策をしており、ジオパークが非常に重要な役割を果たすとなっているので、うまくそれを好機ととらえやってほしい。

委員：大島の人達はあまり外国からの受け入れに積極的でないように感じた。

委員：自転車の世界大会を開催していた。自転車のメッカにして自転車でジオサイトを周るようなことを東京都がしたらよいのではないかと考えていた。

委員：前回審査に行った。報告書を読ませていただき、こんなに変わるものかと驚いた。当時、専門員を2人雇用することは到底考えられなかった。島外から来た人は積極的でもともと島内にいる人は消極的だった。非常に良い方向にしているのではないかと感じた。

委員：専門員の白井さんが相当ひっぱり役。タイムスケジュールの管理もしっかりしていた。役場の中の職員への働きかけも積極的にしているようだった。

顧問：火山博物館名誉館長の立場で行った。この2年間非常によくやってきたと思う。住民への浸透はまだ十分とは言えないが、かなり進んだ。11月21日が割れ目噴火全島避難からちょうど30

年ということで行事なども企画されている。12月17-18日、岡田弘先生を迎えてシンポジウムを開く。住民、行政が危機感を持っている。大島で溶岩が流出するような噴火はだいたい30数年の間隔で起きている。最初は、1950-51年に起きた。前回から30年経ったということで次の噴火に備えて危機感を共有している。

委員長：それでは再認定とすることよろしいか。

[異議なし]

【銚子】

委員：前回の認定審査の際の宿題として、拠点施設の整備、事務局体制の強化、ガイドの質の向上、地元へのジオパーク普及、の4つがあった。拠点施設については、駅からは少し離れているが、ショッピングセンターの中にビジターセンターを作った。ジオパークの概要、サイトへの行き方が全部書いてあってたいへんよい。9時から17時までガイドが2人常駐し、要請があればガイドをする。青少年文化会館では常設の展示も作られていて見応えがあった。事務局体制の強化については、非常勤の地質学と気象学の博士号を持っている専門員がそれぞれ2人、また考古学の専門員が文化財保護センターと兼任しており、計3名の専門員体制をとっている。事務員が2名と事務局長1名。青少年文化会館の中に事務室を持っており常時5人が議論できるようにしており、事務局体制も強化されている。ガイドの質の向上については、ガイド組織をつくり、養成講座を行い、現在20名の認定ガイドがいる。彼らを中心としてガイドの質の向上を図っている。全国でもめずらしく、ジオパークのなかに千葉科学大学という大学がある。その大学の先生と常に交流して学術的な担保を図っている。協力していた先生が異動になってしまうので、今、後任の先生が全面的に指導している。大学との交流もガイドの質の向上に役立っている。市民への広がりについては、一番難しいところ。防災教育の団体、清掃活動の団体、旅館組合等のいろいろな団体とジオパークで結びついて協力しており、ジオパークにおいて市民との連携が図られてきている現れだ。よって、前回の指摘事項に関しては全て改善されているのではないかと。継続的、持続的に活動が行われるだろうということで、現地審査員の総意で再認定としたい。但し、課題もある。ガイドの質の向上について。ガイドはきちんと活動しているが、ひとつひとつのジオサイトの説明はよいが、全体としてのジオストーリーの説明がうまくいっていない。銚子沿岸散策を利用してストーリーを作っているのだが不十分でもう少し、地形地質の要素があるとよい。活動の持続性という観点からいうと、銚子市は赤字一步手前の自治体で無理してジオパークを運営しているというのが現状。市長もたいへん苦しいと言っている。ジオパークの予算は90%市の財政に依存しているので、市民のほうからジオパークに援助をするような動きもある。まだ形にはなっていないので、推進協議会で財政的な持続性を考えないといけないのだが、推進委員である銚子電鉄もホテル業界もあまり儲かっている。儲かっている漁業組合、ヤマキ、ヤマサの醤油業界が少し支えている。ヤマサの濱口梧陵の「稲むらの火」を利用して、ジオパークは防災に役立つと上手く結び付けたストーリーを作っている。市民がサポートしていくような体制も整え持続できるようにする必要がある。財政難は看板がたっていないことに影響する。いくつかある看板は協議会がつくったものでなく専門家が作ったもので説明が難しい。推進協議会でも別の看板を作りたいが予算がないので、現時点では、既存の看板のところにPRコードをつけ、そこから協議

会のジオパーク案内板にとぶようにする工夫をしている。将来的には看板を作りたいとのこと。
以上のような課題は指摘するが、再認定ということでよいと考える。

委員：ガイドに関しては事務局と良い関係でできそうな感じか。また、銚子なりのビジョンを持っているのか。

委員：危機感がここを支えている。予算がない、観光客が減っている。銚子電鉄もいつ廃線になってもおかしくない状況。その中で、ジオパークを契機にしてなんとか交流人口を増やし、経済が潤うようにしようということで、銚子電鉄も旅館業界も参画してくる。銚子電鉄はラボ・トレインといって学研と一緒に、ジオパークに関連した企画をしたりしている。

顧問：海岸に途中降りられる所があり、駐車場をつくったらどうかと言っていたのだが、どうなっているか。あの辺を整備すると防災にも役だってよいのだが。

委員：問題があり、海岸侵食が激しく、ジオツアーができないところもある。

委員長：国のほうで立ち入りを禁止している。

委員：屏風ヶ浦の消波ブロックが見学しやすいよい遊歩道になるのだが、自然の侵食がされなくなり、いろいろな植生が入ってきてってジオサイトの保全がうまくいかなくなって地元でも問題になっている。

顧問：銚子市民は価値をあまり意識していないのでは。

委員：認識しているので賛否両論ある。歩きやすくて見やすい遊歩道がよい、という人とほったらかしておく千葉科学大学の裏山のように植生がどんどん生えてきておもしろくなるので消波ブロックは外してもらったほうがよいという意見に分かれる。

委員長：後者のほうが正しいと思うが。ジオパークの立場からどう言うか。審査というより指導してきた印象があったが、そのへんは改善されているようだ。

顧問：見どころは地層。去年、犬吠埼のところが、素晴らしい所なのに立ち入り禁止になっていたが今もそうか。将来的にはどうなるか。

委員：今も立ち入り禁止。今後も難しい。

委員長：国の方針で立ち入り禁止がずっと続いている。調査という名目があると入ることもできる。

委員：提案だが、ヘルメットを着用してジオツアーとして参加者に限って公開するとかしたほうがよい。

委員長：そこは改善の必要がある。あと賛否両論のある道をどうするか。

委員：小学生にジオ教育をしており地層観察してスケッチしているのを見た。それは良いことなのだが、一方で植生が入ってきている。

委員長：草が生えてよいのかという質問を住民からうけたりするので、住民も関心をもってみている。醤油やイワシで予算を支えてもらわないと。

委員：醤油、イワシ、サンマ、キャベツ等。

委員長：再認定はよろしいですね。

[異議なし]

【八峰白神】

委員：今回はヒアリングを中心に行い、この4年間でどのような活動をしてきたかを伺った。公開

版の現地審査のまとめのところにジオパークの名称とテーマとある。まずテーマについてはしっかり共有されていない。ストーリー、つまり、白神山地、自然の豊かさが八峰町に表れているということを、うまく説明できていない。看板、パンフレットにも文章化されていない。のぼりはいくつかあったが、可視化ももうひとつでジオパークということが見えていない。2番目のジオサイトと保全。2012年の新規認定時には19のジオサイトがありました。今回は41で倍のジオサイトがあがってきた。サイトの科学的な裏付けがされていなかったもので学術的な担保をつけていただきたい。内容も地球科学的な内容というよりは歴史的なものが多かったり生物的なものが多かったりと、その区別がされてない。一方保全はしっかりされている。教育、研究活動。八峰町という7,500人の小さな町で非常に熱心に取り組まれている。小中学校の教員が熱心にジオを学習に取り入れている。秋田大学の協力も得て実験授業をされていた。秋田県ジオパーク連絡協議会を通じて研究養成事業にも取り組んでいる。4番目の管理組織・運営体制については非常にユニークな活動をしており運営推進協議会が町ではなく観光協会の方が会長になり町の外に置かれている。町の職員が事務局を兼ねているが推進協議会のほうに専門員が新しく2名配置された。配置されたばかりなので、ジオパークをまだ学習中であるが熱心に地域のことを考えている。会長が変わってから、熱心な先生が今研究専門員として活動されており流れが変わってきた。5番目の持続可能な発展とジオツーリズム、ガイド養成について。拠点施設としては県の施設だった、ぶなっこランドという森林科学館を町が引受けて事務局が置かれている。ぶなっこランドの中にはNPOの白神ネイチャー協会というガイドの団体の事務局が隣接しており連携をとりながら活動している。ガイドの方達は非常に熱心だが、スキル面からいうともう少し学習が必要と感じた。学術面では林信太郎さんも協力はされているがもう少し知識が必要。ツーリズムに関しては八峰町ではエコツーリズム、ジオツーリズム、グリーンツーリズム、ブルーツーリズムの4つのツーリズムが並列してあり、それらの事務局は全て八峰町がやっているとのことなので、それぞれ連携して活動したらどうかと指摘した。6番目の国際対応。看板は日英併記されており、非常に分かりやすい。Webやパンフレット、ガイドによる外国語解説においては今後の対応が必要。ガイドについて補足。八峰町に海岸線を走る五能線という鉄道がある。たくさんの観光客が利用する。そこではガイドが有料で説明をしている。そのガイドの収益はJRからガイド協会のほうにきてガイドの活動に使われる。7番の防災、安全について。日本海中部地震の教訓があり、碑も建てられているところがジオサイトになっている。日本海は地震がなかったと言っていたガイドもあり、実際はあったのに情報の共有ができていない。ネットワーク活動について。秋田県の4つのジオパークのなかでは一緒に活動し、来年の全国大会の準備にも関わっている。しかし、全国大会に人員を派遣できる余裕がなかなかないので全国でどのような活動がされているかの学習がされていない印象。前回の指摘事項に対する改善状況は、ひとつには秋田県内のジオパークの連携が非常にすすんでいること。また拠点施設も作られている。教育面、地域の価値を再認識する活動については、商工会や観光協会の方が熱心にジオパークに協力する姿勢を見せており、八峰町のジオパークはどうあるべきかについて前向きにとらえられていた。一方、ジオストーリーの明確化、ジオサイトの解説板、ガイドのスキル向上においてはさらなる進展が求められる。結論としては、この4年間の活動のうち前半は少し停滞しており、組織が変わったことによって動き出したのが現状。町全体も雰囲気は作り出されているし町の中でジオに絡んだ食材・食品、製品、

道の駅での紙芝居、など審査中でなく後に教えてもらったので、情報の共有があまりされていない印象があった。非常に悩むところではあるが条件付きの認定と判断する。

委員長：条件付きだと2年後に再審査となっているが。

委員：条件付きの主な条件は何か。

委員：テーマの再認識やテクニカルな部分。組織としては問題ない。ただ、限られた予算の中で看板の設置やガイドのスキル向上、学術的な支援の体制をしっかりと作ってもらいたい。

委員長：ということは2年後の再審査を前提に認めるということですか。

委員：4年前の認定時には、4年の間に深浦と合併して新しいジオパークとしてでてくるのではないかと、かなりの勢いがあった。

委員：深浦町のジオサイトについては、深浦町とは協議を進めていて、合併には至っていないがジオサイトを八峰白神ジオパークに入っても構わないという了解はいただいているとのことだった。よって、その線引きをどうするかがひとつ問題になる。また白神山地の中にサイトが設定されていたのだが、実は八峰町からは白神山地に入れない。青森県側からは入れるが秋田県側からは入れない。それではジオサイトには入れられないだろうという話もした。

顧問：私も行ったが、問題があると思った。ストーリーがよくわからない。砂丘と海岸の地形について、砂丘の知識が間違っていると思った。時代感覚がずれている。元校長だった人が段丘の説明に対して間違いを指摘しても聞かなかった。海岸の地形の話をおもしろくないで岩石、鉱物の話をしてしまう。おもしろい景観の話やせぬに鉱物の話をしてしまうので、一般の人にはつまらないだろう。その点を改めジオストーリーをきちんと作ってもらわないといけないと思う。内容に間違いもあるので専門家に協力してもらい看板を訂正してもらう必要がある。

委員：全く同感だ。

顧問：やはり4年認めるというわけにはいかなくて、2年条件付きで認定せざるをえないのではないかなと思う。

委員長：ストーリーの中で水の扱いは？

委員：ブナ林にながれてくる水があるのだがそれを上手く説明できていなかった。

顧問：滝もあるのだが全面にほとんどでてこない。

委員長：ブナ林との関係がでてこない。

顧問：4年前に視察した。去年、北のほうを調査したことがある。国道をずっと通りぬけたのだが、ジオパークであることが全くわからない。拠点施設だと思われるハタハタ館にはパンフレットがひとつも置いていない。唯一あったのは北海道地図の地図がひとつ置いてあっただけ。ジオパークというのが全くわからなかったのでぶなっこランドに行き、せめてパンフレットくらい置くように言ったのだが、その点はどうだったか。

委員：確かに北海道地図の地図は置いてあるが、パンフレットはほとんどない。ぶなっこランドは来年度、改修するそうだ。いままでは白神山地の紹介ということが多かったがジオパークを中心とした展示に変えたい、とのことだった。だいぶ意識は変わってはいる。

委員長：すると2年間で変わる見込みはある、ということですね。

委員：町長も非常に熱心。

顧問：日本海中部沖地震も33年経っているのでかなり風化しているかと思うが、その際、八森で漁

業組合のある女性が機転を利かせて沿岸にいた人達を助けたという話があるのだが、きちんと伝わっているのか。

委員：意外と伝わっていない。日本海中部沖地震のジオサイトのところで当時被害を受けたところの津波の写真とかはあるが、今のような話はなかったと思う。そういうことを展示する場所がなかなかない。

委員：今後2年で深浦との改善をし、隣接地域と一緒にになるとかの可能性は。

委員：今の体制ではしっかり対応してもらえらると思う。ただ白神山地全体で取りこんだエリアの話は青森県や他の関連があるのですぐにはなかなかすすまないと思うが深浦町とは話をしている。学術的なサポートとして秋田大学と町が協定を結んでいるが、ジオパークということではなく、教育活動に関しての連携。もう一歩すすんで積極的に林さんに協力を求めたらよいのではないか。

委員：当初林さんは積極的に動いていたのだが、支援をしてもなかなか話がとおらないということだった。

委員：事務局も困っていた。そのへんは脱却しないといけないという認識はあった。小さな町なので町民も皆顔見知り。その中で異論を唱えてもなかなか変えられない雰囲気があるのが今までの現状。

委員長：19が41にエリアが倍増して申請してきているのをどう考えるか。

委員：深浦と一緒にいるからそれは先取りとして認めるという認識でいたと思うが。

顧問：最初の認定の時は深浦町長もついてきていた。非常に仲も良いということも聞いていた。白神山地のめぐみがひとつの重要なテーマになっているので深浦も入れたほうが全体としてストーリーを作るのによいということで、その期待はずっとしていたし、進んでほしい。

事務局：深浦のほうの話は事務局側で話しがついたのでこれからエリア変更の申請がでてくる。詳細版にもあるが、最後の頁にエリア拡大の地図がついている。エリアについて科学的な根拠があれば、今回の申請で認めることも考えたが、海岸線を囲っただけのもので明確なエリアがわからないので、今後改めて申請がでてくる。

委員：深浦町の一部が入ったところで八峰白神ジオパークの名前で拡大していく。1割未満なので議論して承認を出すということで問題ないということですね。

事務局：エリアの拡大については双方の課長レベルではあるが、合意されているので、最終的にはエリアを入れるということの文書の交換になる。サイトとしては前回の審査で認めているので後付けではあるが、エリアの拡大になるということ。

委員長：今回の判定には特に関係しないということか。

事務局：はい。

委員長：それでは2年後にもう一度再審査するというところでよろしいか。

[異議なし]

【ゆざわ】

委員：ジオサイトの保全について。ジオポイントが379箇所リストアップされている。地元の方々が大切にしている所を挙げているので、それはそれで評価できる。このポイントは自然が造形したものと人が造形したものがある。石造、石碑も含まれる。379箇所も管理するのは難しいと思

うのでどのように管理するか、また優先順位を取捨選択するよう助言した。これら全部が見所として紹介されているわけではない。保全対象として事務局でリストアップしている。テーマとストーリーについては前回の指摘事項にもあったもの。「いにしへの火山の恵み あつき雪 いかして築く歴史と暮らし」を新しいメインテーマとして掲げている。しかし、まだジオストーリーを意識したガイドがまだされていない。これからガイドと事務局が一体となって考えていくという姿勢がみられた。教育・研究活動について。この点において最もすばらしいジオパーク活動が見られた。ほとんど全ての小中学校で、ふるさと学習として授業が行われており、書き込めるジオパークノートや副読本、パンフレットが使用されている。高等学校はまだ実施例は少ないが試みはある。未就学向け教育プログラムについては平成 29 年度に完成を目指しているとのこと。生涯学習としてもゆざわ学が毎年 10 回開講されており、大人の学習の機会も設けられている。教育活動のまとめとして、学習交流発表会が行われて、さらに冊子にして学習成果がまとめられている点がすばらしい。子供達が農産物を使用したメニューや、商業高校の学生が特産物を開発するといった、地元を誇りに思い地元の資源を活かすことを子供達に教えている。活動の拠点施設として「ジオスタ☆ゆざわ」が作られている。化石の資料室、地熱の展示、岩石、お酒を作る道具が公開されている。誰でも入れる。展示パネルが難しいという点があるが、今後改善されていくと思われる。研究活動については「秋田まるごと地球博物館ネットワーク」があり、学術調査の報告書をまとめている。秋田大学との連携協定が結ばれており、湯沢市と秋田県から学術研究奨励補助金が制度化されている。この研究成果をガイドまでどのように浸透させていくかがこれからの課題として挙げられていた。管理組織・運営体制について。課題として指摘されていた専門員については、地質学の専門員が 1 名雇用された。管理組織としては推進協議会の担当者が長年携わっているということで地元の人や部会との連携がうまくいっていると感じた。地域の持続可能な発展・ジオツーリズム・ガイド養成について。地熱発電、地熱を利用した農産物、特産物の栽培、加工、特に温泉を利用したハウス栽培がローソンと提携して販路を確立している。実際に U ターンして栽培に携わっている人にも会った。この活動は持続性に貢献すると思う。外国語対応について。まだパンフレットが英語になっているだけで、あまりされていない。温泉地なので外国人旅行者を取り込むためにウェブサイトを利用して広く情報発信することが課題として挙げられていた。認定ガイドによるツアーも実績を積んでいる。まだ試験的だが、仙台発着、東京発着のバスツアーを開催している。かなりお客の数もあり、これから収入を得られるようにやっていくとのこと。ツアー会社のほうは協議会に参加している観光業 2 社。うまくいくと思う。課題に挙げられていた防災活動について。まだ取り組みがほとんど行われていない。この辺は自然災害がないから、と地元の人受け止めているようだ。そうは言っても活断層も地すべりもあるから活動の中に入れるように指摘した。ジオサイトに噴気孔など危ないところがあるが、安全対策はされている。ガイドが付けば入れるという特別感のあるツアーを行っている。ネットワーク活動の貢献は、特に東北地方においては積極的に行っており、隣接する栗駒山麓とは連携が強く、今回の現地審査も多くの関係者が栗駒から同行していた。将来的にはユネスコ世界ジオパークを栗駒山麓と連携して 10 年程度かけて目指していきたいとのこと。加盟時に出された 13 点の課題事項はすべて改善が図られており特にボトムアップ型の活動がうまく行っていると感じた。結論として現地審査員 3 人とも再認定に値すると判断した。

事務局：災害に関しては、地域学習の中で地学的な要素をいろいろな形で伝えようとしている。間
接的ではあるが、災害地域の理解ができるような地学的な基礎を教える教育を熱心に行っている。

委員長：ジオポイントという用語については事務局から何か。

事務局：ポイントとサイトと同じように扱われているところもある。現状ではばらばらなので、明
日の研修会で用語の整理をする。

委員：前回の審査でもボトムアップ型の地域活動を評価した。その際問題になったのは拠点施設。
廃校を利用した拠点施設は離れたところにあり、なかなか行きづらいので、国道沿いとか駅近に
作ったらどうかと指摘していたのだが。

委員：JR 湯沢駅の改築にあわせ、駅構内にジオパークをメインとした観光案内施設が整備されてい
る。かなり広いフロアでガイドも常駐しており、パンフレット、地図、パネルの展示があり、
駅を降りた人が必ずアクセスできるようになっている。

委員：持続可能性の問題はどうか。

委員：首長の話では、この地域の持続性はジオパークになっていることを強く認識されている。10
年 20 年かけて子供を育てるように育てたい。自分がいなくなった後も続くように引き継ぎはきち
んとしたいとのことだったのでその点は大丈夫だと思う。

委員長：観光業界も熱心なのではないか。

顧問：バスツアーで 100 人くらい行っているが無料でやっているのか。

委員：無料ではない。バスの費用を事務局が補填する形で、まだ収益にはなっていないが損にもな
っていない。

顧問：院内銀山に行ってみたら誰もいなかった。昔、銀山だったという看板があるのみ。重要な場
所だと思うが。

委員：院内銀山の地域の方に最初にジオパークを提唱した議員さんがおり、ガイドも活発。地元の
人が自分で石を持ってきてジオ花壇を作ったり、高齢者施設と幼稚園をつなぐ場としても利用し
ている。

顧問：銀山の跡地の説明がない。大事なジオサイトとしては弱い。

委員：事業者との関係で、勝手には入れないと思うが。

事務局：展示がある建物には行った。私有地なので、設備をすぐに作ったりすることはできないの
で、解説は駅に隣接する建物内で行う。しかし、改善する方向で指摘することはできると思う。

顧問：交渉してみてもよいのではないか。

顧問：防災活動があまり行われていないのは困る。現地で災害があまりないから、という認識だそ
うだが。長い間災害がない所ほど、次の災害が近づいている。1896 年に陸羽地震を起こした千屋
断層が南北に伸びている。そのほぼ南に隣接するのがゆざわの東側の山地と平野の間。現状認識
は持ってもらわないといけない。

委員：栗駒山麓の現地審査をした際も将来的にはゆざわと連携していきたいと言っていた。今回は
栗駒からかなり来たのか。

委員：10 名ほど来た。

委員：お互いに行き来できるようなツアーの開発はあるか。

委員：連携したいというやりとりはある。

委員長：よければ認定ということにしたい。

[異議なし]

<プレスリリース原稿作成>省略

<その他の議事>

(1) ユネスコへの申請過程について

事務局：ユネスコ世界ジオパークに関しては正式事業化になってからユネスコ国内委員会から当委員会は機関認証を受けている。よって日本ジオパーク認定の部分とユネスコ世界ジオパークの部分の審査が委員会に課せられている。今日は日本ジオパークの審査もしたが世界のほうは来年の再認定審査の事前審査の位置付けがある。世界ジオパークの審査は5月のプレゼンと夏の現地審査は変わらないが、大きく変わるのが、その年の7月1日までに意思表明書を出さなければならない。通常、委員会の審査後でないと意思表明は出せないで、1年目は日本ジオパークの推薦可否の決定までを行い、翌年の7月1日に意思表明書を出し、申請書の準備をしてその年の11月末までに申請書を提出する。さらに翌年現地審査を経て4年目の春に正式にユネスコ世界ジオパークになる、というのが最短の過程になる。再認定に関しては8月の段階で1頁の要約は既に提出されている。11-12月で現地審査を行った。12月上旬に再認定の可否決定。来年の1月10日までに現況報告書を提出するように求めている。この現況報告書をこちらとユネスコ国内委員会のほうで確認をして最終的には2月1日の締切までに提出する。その後、来年の5-8月の現地審査、9月にユネスコカウンスルでの決定、という流れになる。島原の再認定については、1月10日に出る現況報告書にむけ、細かい条件をつけていただいている。ユネスコ世界ジオパークのほうは意思表明書の提出があるために1年審査が延びることになる。ここの審査日程については委員会で判断できるので、5月のプレゼンを受けた段階で7月の意向表明が可と判断ができれば期間の短縮は可能。再認定のほうもそうだが、この委員会で審査時期も含め決定していただければ変更は可能。

委員：新規も再認定もそうだが UGG の地域だけ別日程にしてもよいのでは。UGG の再認定地域の審査を新規のほうと一緒にしてもいいと思うが。

事務局：新規申請地域、再認定地域の数を考慮すると別にまた日程を組むのは難しい。新規の数が少ない年には変更することはユネスコの提出期限にあわせてもらえれば委員会で決めていくことは可能。

委員：新規地域の審査の時に UGG の再認定だけ同時にするのは問題があるのか。

委員：あまり変わらない。現地にとっては夏でも秋でもあまり変わりはない。

事務局：申請書をチェックする時間も考慮しなくてはいけない。期間は延びるが今のユネスコ世界ジオパークのレベルを考えて、しっかりとした審査ができるので原則のとおりでよいと思う。

委員：再認定審査のほうは厳しいので、UGG の再認定だけ夏に現地審査を一緒にやったほうがよいように思う。新規と同じ9月に UGG だけ再認定の結果を出してしまうのはどうか。

事務局：新規の数による。来年度の新規希望地域が6つある。秋には再認定10地域あるのでバランスをみて判断したい。

委員：例えば島原半島など再審査を受けるユネスコ世界ジオパークから現況報告書が提出されてく

るのでそれをこの委員会で確認しなければならない。多いので今回審査した人達を中心となって文章をすべて確認する作業を分担したい。特にこの委員会で指摘したことをちゃんと盛り込んでいるかどうか。されていない場合はその旨を指摘することになるだろう。

委員：新規と同時期にやったほうがこういった時間がとれると思うが。秋の現地審査を夏に前倒しすれば、こういった時間がとれる。

委員長：数が多い場合は委員会開催を増やすしかない。

委員：5月の段階で書類をもらって審査するので今決めないと。英文の書類を確認するのに時間を十分とれるようにするためなので、申請書を早く出してもらうことに協力していただきたい。9月の委員会で結論ができるように現地審査ができるように調整を考えてはどうか。

委員長：それも考慮して事務局で判断してください。

(2) エリア拡大について

事務局：南紀熊野からエリア拡大申請が出ている。ユネスコ世界ジオパークの申請を見込んで一筆でエリアを設定することが目的。繋がっていなかった飛び地になっていた2地域を繋ぐということと海域の島を繋ぐもので面積は10%未満でエリア拡大を認めるというもの。伊豆半島ジオパークも日本の申請、UGG推薦申請、今回ユネスコに提出した実際の申請書ではエリアが少しずつ増えている。その件については、10%を超えているので委員会に申請する必要があったのだが、既に申請が出ているので事後承認の了解をいただきたい。既に隠岐の場合も陸地のみで認定しているが、世界申請の段階で、島前、島後を海域で結んでおり面積としては2倍になっている。これも既に認定されているので事後承認としてご了解いただきたい。

委員：それは書類上、承認されたとして残しておいてください。

事務局：霧島、桜島・錦江湾については現地審査をせず見送りとした。2地域においては合併しないとユネスコ世界ジオパークの推薦はしないということを委員会として決定している。この件については、日本ジオパークとして一つに合併しなければいけないのか、それとも世界申請のためだけに一つのジオパークとして申請して霧島、桜島・錦江湾としてのジオパークのままでもいいのか、という質問がきている。

顧問：たとえ繋がっていても運営組織がそれぞれ分かれて2つあるひとつのジオパークというのは認められない。

委員長：それは明確ですね。ユネスコ世界を目指すなら組織を統合する必要があるということは伝えるように。最後、今後の予定。

事務局：5月21日日曜日9時から13時30分幕張メッセでプレゼンテーション、委員会が行われる。20日土曜には例年行われているジオパークセッションが開催され、各地域の取り組みが発表される。多くの人に来てもらうべきだとの要望を前回いただいたので今回は1000人収容できる会場にした。

委員長：予定を入れておいてください。

了

<各地域への結果連絡と記者発表>省略